

能登 SDGs ラボ 2021 年度提案型実践プログラム (PG-3)

地域と大学の協働型研究の成果体系化 に向けた予備研究

報告書

2022年3月

能登における地域・大学間協働に関する研究会
(略称「能登 CUC 研究会」)

※CUC：地域・大学間協働 (Community-University Collaboration)

要 旨

- 能登における、あるいは能登に関する調査研究は多いが、その成果が散逸している状況に鑑みて、こうした調査研究の成果物を一元的に検索できるデータベース構築を近い将来に目指す。さらに、能登に関する調査研究（地域内の調べ学習なども含む）が発展し、それが能登地域の活性化につながることを究極の目標とする。
- 2021 年度に実施する本プログラムでは、データベース構築に向けた基本的な方針の検討のため、有志による研究会を発足し、計 6 回のオンライン会合を中心とする活動をおこなった。会合記録にグラフィック・レコーディングを導入した。
- 研究会で調査と議論を重ねた結果、データベース構築に向けた基本的な方針を設定した（下記参照）。
- 並行して、データベースの中身となる資料のメタデータ（本体でなく、各資料の属性を示すデータ）をリスト化する作業に着手した。
- 本プログラムは 2021 年度で一旦完了するが、本研究会の成果をもとに 2022 年度以降も活動を継続する。その際、金沢大学や能登 SDGs ラボにおいて事業としての位置づけをおこない、然るべき実施体制を整える。
- データベース構築と並行して、大学によるフィールドワーク等の受け入れや、研究と実践の交流集会開催など、より大きな目標に向かって関連活動を推進する。そのための外部資金申請も検討する。

データベース構築の基本方針

主たる利用目的・利用者層の想定

- 利用目的（想定される状態）：能登について学びたい人が、能登における／に関する既存の資料（調査研究の成果物を含め、新たな学びに役立つもの）を一元的な経路から検索・入手するため。
- 利用者（エンドユーザー）：
 - 市民全般。能登の地域住民を含め、能登について学びたい人。中学生程度から高齢者まで幅広い年代を含む。
 - 能登における／に関する調査研究を実施する人。学生、大学教員など。

対象となる「資料」の範囲

- 一定の方向性を持って編集された、能登に関する資料。

データベースの構成と活用促進手段

- リポジトリ：データベースの核となる貯蔵場所。
- ポータルサイト：エンドユーザーとのインターフェース（親切的な入口）。
- その他、活用促進手段を工夫して展開。

本報告書の構成

1. 背景、目的および活動の概要
 - 本研究のきっかけとなった問題意識
 - 2021 年度（本研究会）の成果目標
 - 具体的な事項
 - 活動内容
 - 研究実施体制
 - 中長期的に目指す状態（2022 年度以降）

2. 研究会会合開催結果
 - 第1回オンライン会合
 - 第2回オンライン会合
 - 第3回オンライン会合
 - 第4回オンライン会合
 - 第5回オンライン会合
 - 第6回オンライン会合
 - グラフィック・レコード

3. その他の活動
 - 珠洲市民図書館との打ち合わせ
 - 大学・地域間協働推進の実践
 - オンライン講演会への参加

4. データベース設計の基本的な方針
 - 主たる利用目的・利用者層の想定
 - 対象となる「資料」の範囲
 - データベースの構成と活用促進手段

5. 既存の研究成果情報のリスト化
 - リスト作成作業
 - 記載項目などの検討
 - 2022 年度以降の作業

6. 2022 年度以降の活動目標
 - 大学のフィールドワークとの協働強化
 - 実践と研究の交流集会
 - 外部資金獲得の可能性
 - 実施体制の整備

7. あとがき

1. 背景、目的および活動の概要

本研究のきっかけとなった問題意識

- 能登における、あるいは能登に関する調査研究は多い。石川県内や全国各地の研究者や大学生が能登を訪問してフィールド調査をすることも少なくない。しかし、成果はそれぞれ持ち帰られ、地域側として一元的に収集・保存・公開できていない。



2021年度（本研究会）の成果目標

- 2022年度の独自データベース設計・試用開始を視野に、情報収集と方針検討をおこなひ、その結果が報告書として作成される。
- データベースは誰でも使いやすく、遊び心を大切にしたい。その精神を活かし、報告書にもグラフィック・レコーディングなど視覚的な楽しさを含める。

具体的な検討事項

- 先進的な他地域の実践事例からの学び
- データベース設計に向けた検討
- 既存の成果情報収集、リスト化
- 運用体制の検討（組織、予算など）※図書館との協働も検討

活動内容

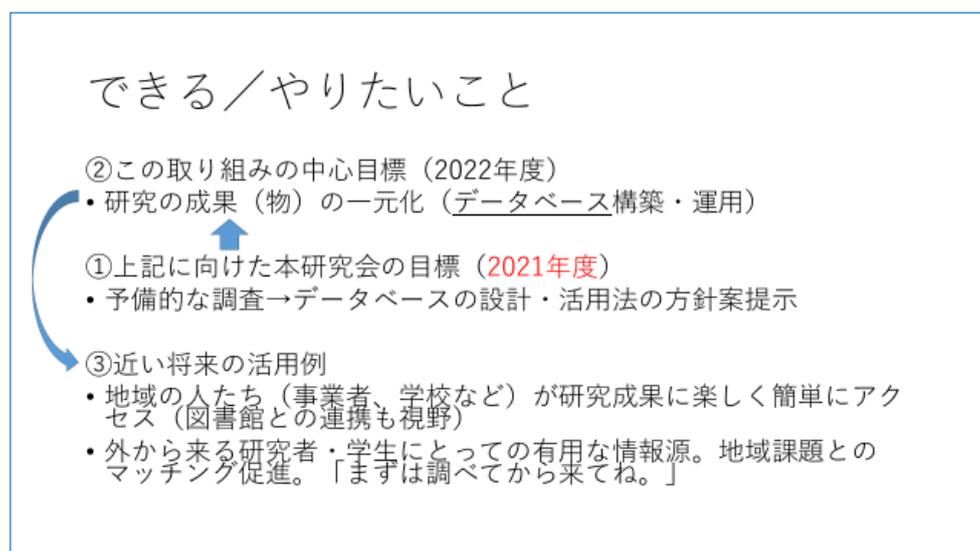
- オンライン会合の開催（年度内に合計6回、詳細は後述のとおり）
- 個別の情報収集・整理
- 趣旨に賛同する人たち（潜在的な利用者・協力者）との協議

研究実施体制

- 能登 SDGs ラボの 2021 年度提案型実践プログラム「地域と大学の協働型研究の成果体系化に向けた予備研究」(PG-3) の活動として研究会を立ち上げて実施。
- メンバー（役員以外は 50 音順）
 - 北村健二（能登 SDGs ラボ）【代表】
 - 木下靖子（金沢大学）【副代表】
 - 伊藤浩二（岐阜大学、能登 SDGs ラボ連携研究員）
 - 川邊咲子（国立歴史民俗博物館）
 - 岸岡智也（金沢大学）
 - 小林秀輝（金沢大学）
 - 志保石薫（奥能登大学連携地域サポーター）
 - 淑瑠ラフマン（金沢大学）
 - 杉盛啓明（珠洲市企画財政課）
 - 高田良宏（金沢大学）
 - 寺口学（能登町教育委員会）
 - 馬場千遥（珠洲市企画財政課）
- 記録（グラフィック・レコーディング）
 - 納谷春佳氏（haru デザイン）に会合の記録を依頼。
 - 近年、広く活用が進んでいる描画的な記録（グラフィック・レコード）を作成。
 - この記録も本研究成果の一環として位置づけて本報告書に収録。

中長期的に目指す状態（2022 年度以降）

- 能登における／に関する「学びのタネ」（となる資料）を、地域住民や外部研究者など、あらゆる人たちが活用しやすい仕組みがある。
- その仕組みにより学び合いが促進される。例えば大学（教員・学生）による訪問・滞在型フィールドワークなどが、地域側にも訪問者側にも、より有益なものとなる。



2. 研究会会合開催結果

第1回オンライン会合

日時：2021年9月1日（水）13:30-15:00

参加者：メンバー計9名（北村（企画・進行）、木下、伊藤、川邊、小林、志保石、杉盛、淑瑠、馬場）、記録1名（納谷）

内容：顔合わせと研究会の目的・活動に関する意見交換

概要：

- 本研究会の大きな目的について共有→特に異議なし。
- 参加者それぞれの関連活動や思いを共有。自身の能登におけるフィールドワーク、地域側として大学生のフィールドワーク受け入れ支援など、軸足はそれぞれ異なるものの、地域と大学の協働という点に関しては全員が共通。
- データベース構築にあたって、想定する利用者層など詳細は今後要検討。

第2回オンライン会合

日時：2021年10月27日（水）13:30-15:30

参加者：講師1名、メンバー9名（北村（進行）、木下、伊藤、川邊、小林（企画・進行）、杉盛、淑瑠、高田、馬場）、記録1名（納谷）

講師：対馬市役所SDGs推進室 前田剛氏

内容：対馬市の域学連携事業等についての事例紹介

概要（北村所感含む）：

- 過疎化などの地域課題への対策として域学連携に取り組んできた。→能登と共通。
- 地域外からの研究受け入れと、地域内の活動の発信と、両方を同時に促進。→双方向であり、関わる人は老若男女問わず多様。
- 「対馬学フォーラム」という毎年開催の行事が重要な仕掛け。全員が一堂に会する機会であり、参加者の意欲が高い。→大きな成果を上げており手本となる活動。しかし、高い意欲で多くの人々が参加する仕組みを継続していくのは大変。ここに非常に高度なファシリテーションの工夫があるのだろう。
- ポスター発表のための支援など、各主体の発信媒体ごとの得手不得手への目配りがその一つである。
- データベースも既に構築済み。「先進的な能登を含め他地域の例を参考にし事業設計した」というが、少なくとも現在では、取り組みの全体像は能登より対馬のほうがはるかに先を行っている印象。学ぶべきことが多い。

第3回オンライン会合

日時：2021年11月16日（火）14:00-16:00

参加者：メンバー9名（北村、木下、伊藤、川邊（企画・進行）、小林、杉盛、高田（講演）、寺口、馬場）、記録1名（納谷）

講師：金沢大学 学術メディア創成センター 高田良宏

内容：学術研究情報の蓄積・公開、金沢大学資料館のリポジトリや環日本海域環境研究セ

ンターのデータリポジトリの事例、研究情報の逐次公開の取り組みなど

概要（北村所感含む）：

- データ公開はプロジェクトとして実施すると、プロジェクト終了後に予算・人員が途絶えて休止してしまう場合がある。→能登においても留意が必要。
- 論文など最終的な研究成果のみでなく、加工前のデータにも需要がある。
- 研究者は「整えてから公表」の考え方が多い。活用促進のためには、加工前のものも含め逐次公開を促進することも重要。→能登においても検討すべき事項。
- 大学などがそれぞれ研究成果やそのメタデータを保管するリポジトリであれば、既存のサービスを活用するなどの手段で比較的簡単にデータベースを作れる可能性あり。

第4回オンライン会合

日時：2021年11月30日（火）14:00-16:30

参加者：メンバー7名（北村（進行）、木下（記録）、川邊（企画・講演）、小林、高田、寺口（講演）、馬場）

講師1：能登町教育委員会事務局 寺口学

内容：能登町における地域の歴史・文化に関する資料や研究情報の発信の取り組み（地域デジタル図書館など）や、能登に関する研究を行う若手研究者による「能登総合研究会」について

講師2：国立歴史民俗博物館 川邊咲子

内容：能登町当日地区や奥能登国際芸術祭にて取り組んできた地域民具コレクションに関する情報発信と活用について

概要（北村所感含む）：

- 寺口氏の本務は能登町教育委員会の学芸員。コロナ禍で生涯学習活動が困難ななか、動画を活用した公民館の活動支援など工夫をしている。デジタル図書館の整備により、地域資料の公開にも着手。ほかにも廃校舎での地域博物館開設など幅広い取り組みを展開。→能登において市町の間での連携が重要。その意味でも、能登町の先駆的な取り組みは貴重。
- 有志による「能登総合研究会」も自主的な活動として発足。研究集会の開催や学術誌の独自発行も複数年にわたる実績あり。能登に関する多様な分野の研究を横につなぐ取り組み。コロナ禍により現在はあまり大きな活動ができない状況。→本研究会が目指すことと大いに重なる点あり。先行する取り組みであり、ここから学ばせてもらうとともに、今後連携を図っていくことが大切。
- 川邊氏は金沢大学大学院在学中から能登で（同時にフィリピンのイフガオでも）地域民具コレクションの研究（地域における民具の収集とコレクションの意義についての研究）のためフィールドワークを重ねてきた。民具のデータベースを構築し、地域での展示などにも貢献。
- 珠洲市では第2回奥能登国際芸術祭の「スズ・シアター・ミュージアム」に協力。博物館的保存か廃棄かの二択でなく、その中間としての民具の「緩やかな保存」という考え方を提案。地域住民が生活や地域活動の中で民具の保存・継承を行えるように支援。
- 現在は国立歴史民俗博物館（歴博）で総合資料学創成プロジェクトに従事する研究員。同プロジェクトでは、各所に散在するデータベース所蔵のデータを検索できるメ

タレベルのデータベースである「総合資料学情報基盤システム (khirin, (Knowledgebase of Historical Resources in Institutes))」を構築・運用中。

- 地域に入ってフィールド研究をおこなってきた身としても、成果の地域還元とその仕組みづくりに大いに関心あり。

第5回オンライン会合

日時：2022年1月19日(水) 13:30-15:15

参加者：メンバー8名(北村(企画・進行)、木下、川邊、岸岡、小林、杉盛、高田、馬場)、記録1名(納谷)

講師：総合地球環境学研究所 准教授 熊澤輝一氏

内容：「つなぐ×ひろがる 地球環境学ビジュアルキーワードマップ」

総合地球環境学研究所において開発した「地球環境学ビジュアルキーワードマップ (VKM)」の目的や設計上の留意点について

概要(北村所感含む)：

- VKMの主目的は、総合地球環境学研究所(地球研)のこれまでの研究成果の体系化と活用促進。
- 利用者想定は、(1) Web上にある情報資源および地球研のデータベースから、地球環境学に関する情報を収集する人、および(2) 地球環境学と地球研について知りたい一般の方、学生、専門家。主な対象は、関心のある大学学部生、大学院生、専門外の領域と自身の専門との関わりを探る研究者。上記利用者想定 of 1つめは「利用目的」による定義、2つめは「人」(属性)による定義。→能登でも参考になる整理のしかた。
- 多数の研究プロジェクトそれぞれにおけるキーワードを20個選定し、それらをアイコン化。アイコン製作は専門のデザイン会社が担当。キーワード(アイコン)同士の関連づけの定義に情報学のオントロジー工学が用いられている。ただし、関連づけ作業はあえて人(熊澤氏)による手作業。内容への深い理解がないと不正確となるため。同様に、各キーワードの説明文作成なども手作業。→この部分(深い知識と多大なる時間・労力を要する手作業)は能登では困難。
- 利用者は、関心のあるアイコンをクリックすることから地球環境学に関する様々な知識を得ることが可能。あるキーワードについてさらに深掘りしたい人は、表示される原典資料(書籍やウェブ資料など)を活用することも可能。
- 情報が掲載される原典資料は3種類。(1) 地球環境学関連の書籍(の所在情報；ISBN付)、(2) ニュースレター記事や講義資料など研究所データベース「地球研アーカイブス」に格納された成果物、(3) 関連する外部(ウェブ上)の参考情報。
- キーワードアイコンと別に「ピクトグラム」も作成。キーワードが研究プロジェクト単位であるのに対して、その上位にあるプログラム単位で選定した用語を表現するのがピクトグラム。
- VKMは2022年3月から本格稼働。ここまでの開発がゴールでなく、これから様々な展開が期待される。このサービスを活用する場面(教育コンテンツ、ワークショップなど)もデザインして社会に示していくのが今後の課題。→具体的な活用の場面を設定することについて、能登でも大いに参考にしたい。
- 全般的所感：VKMは敷居の低い入り口だが、その裏に極めて高度な設計思想と技術

と労力がある。また、地球研は既に「地球研アーカイブス」という機関リポジトリを有しており、そのコンテンツに誘導する手段という一面も VKM にある。能登においては独自のリポジトリもまだこれから作る段階。まずは既存の研究成果情報を集め基本的なリポジトリを立ち上げ、並行して敷居の低い楽しい入り口も同時に設けるのがよさそう。活用の場面を自分たちで設計し、使いながら育てていく形。「楽しい入り口」に関しては、本研究会が活用しているグラフィック・レコードのような視覚的なデザインの要素が有用。

第 6 回オンライン会合

日時：2022 年 2 月 4 日（金）10:00-12:05

参加者：メンバー 8 名（北村（企画・進行・記録）、木下、伊藤、川邊、小林、杉盛、高田、馬場）

内容：研究会の総括。本報告書作成に向けた方針の確認など。

概要：

（1）データベース構築の基本方針

- 誰が、何のためにデータベースを利用するのか？ 現時点の定義を設定。
- 利用者層は、大きく分けて市民と研究者の 2 種。どちらも利用しやすい設計となることを目指す。
- このデータベースが扱う「資料」の範囲は？ 現時点の定義を設定。
- データベースの構成要素：リポジトリ（メタ）データの貯蔵庫）とインターフェース（ポータルサイト）。活用促進手段として、本の「帯」に相当する目利き情報や、SNS などによる交流があり得る。
- 議論の結果として基本方針を定める（本報告書の「4. データベース設計の基本的な方針」を参照）。

（3）既存資料のリスト化

- メンバー（馬場）の尽力により、まずリストの初版が完成。これは大きな一歩。その初版をもとに、本研究会内でメンバーが新たに資料の情報を入力したほか、使用感や入浴項目の設定についてメールで意見交換した。今回の会合でも以下の各論について議論。
- 資料の種類分けの基準は「ジャンル」（その資料を生んだ活動の種類）か、あるいは「成果物種類」か？→成果物を主たる基準とする。
- ただし、活動のジャンルという項目は能登のデータベースの特徴になる可能性あり。基本的な活動種別はドロップダウンのリストから選択するのがよいか。
- 基本種別のほかに、「その他」のような自由記述欄を設けるのも一案。活動の性質を示すキーワードをカンマ区切りで自由記述できるようにすると、検索で拾われやすくなる。
- 論文・書籍の書誌情報の記載場所→当面は「所属・主催」欄。項目の表現は今後検討。
- 「自治体」と「地区」の意味と使い分け→地区は珠洲市内の 10 地区を当初想定した。今後は大分類（奥能登、中能登、口能登）、中分類（自治体）、小分類（地区、集落）で既存の基準で分類すると分かりやすいだろう。
- 書籍全体か、あるいはそのなかの章の単位か、どの階層で入力？あるいは両方？→書

籍全体で同一の著者の場合は書籍単位。章によって著者が異なる場合は章単位で入力するのを基本とする。論文集などは後者に該当。

- 能登里山里海 SDGs マイスタープログラムの卒業研究・プロジェクト研究の成果報告のメタ情報は優先的に公開。個別 PDF リンクを提供するかどうかは要検討。
- 雑誌「能登」などに掲載された記事なども記事単位で入力可（データベースが扱う「資料」に該当すると判断できるものについて）。ただし、旅行ガイド本などまでは必ずしも入力する必要はない。
- 学生の学会発表要旨など、どこまで入力するか範囲→「能登における／に関する今後の調査研究に役立つと考えられる資料」であると入力者が考えるものは入力。
- 最終成果物でない「データ」について→一次データ、二次データ、非デジタルデータなどデータ種別の項目を入れるかについても検討。
- 詳細は今後継続検討。データベース実装を視野に JPCOAR や WEKO などリポジトリで用いられる基本項目を押さえつつ、能登のデータベース独自の項目を合わせて特色づけを図っていく。

(4) 事業としての今後の位置づけ

- 金沢大学の「能登里山里海 SDGs 研究部門（珠洲市）」の一環とすることを検討していく。ちょうど同部門ウェブサイトの改訂に入るところで、関連付けの可能性を模索。データベース運営の主体を同部門とし、物理的なデータベースの置き場を金沢大学のサーバにすることは可能。リポジトリへのアクセス権限は設定次第。本研究会メンバーなど特定の学外関係者を運用主体に含める方法もある。そのような事業やその実施体制を含む位置づけの整理を図っていく。
- 能登 SDGs ラボの提案型実践プログラムとしては 2021 年度で一旦完了するが、ラボの活動としても位置付けられるよう、運営委員会での報告・協議を続ける。
- システム開発には一定規模の予算が必要。外部資金への申請も選択肢となる。

③ 能登CUC研究会 (仮)

今回の参加者!!

役割分担は?

みんなやります
 主眼、事務局は水村
 取次ぎは小林さんなど
 向付はることは積極的にしてほしい
 無理強いはなしにしたい

他にやりたいこと

珠洲の郷土誌もデジタル化しては?

→ 西山先生 (珠洲の歴史に詳しい)

蔵書を後世に残したい

デジタル化で生かす...

「5氏」
]=テン" → 資金と、アミテ 喜内家に頼んでほしいかも!
 スタートアップ (デジタル化)

馬場さん
 学生の頃の地域研究
 受け入れ側、送り出し側
 3つの立場を経験

木盛さん
 市役所UIターン促進・減額連携
 自分も研究しては欲しい、
 市内知らない人のサポート

木下さん

里海教育に力、または
 能登学会スタッフさん!
 里山里海学会(12月)も検討して
 かもいい、何かが知るといいかも...

小林さん
 7月か8月能登学会
 九州の博物館にいた
 対島で研究していたので、その
 経験いかしたい。

志保さん
 8年前に珠洲に
 東京の大学生だった時に珠洲で研究
 「能登史」に参加。いま協力。
 ティーチャングラフィックも
 過去の調査を紹介すれば
 より深い研究できる

川邊さん

歴史民俗博物館にいます。
 金大生時代に能登で研究(民具)
 芸術系にも関わった。
 自身も情報の共有で幅広いに
 興味ある。研究中。

伊藤さん

岐阜大学にいます
 能登を12年研究してきました。
 今も7月か8月通って
 4ヶ月前に話した!

ニユクルさん

能登の研究情報
 集めて活かしてほしい

+ 北村さん (発起人), 納谷

第2回 CUC 研究会 ゲスト: 前田 剛氏 (対馬市役所)
域学連携の新展開

1枚目 2021.10.27

持続可能な島づくり戦略

若者が出ていく
人財(リターン)いない!

地域おこし協力隊を活用
域学連携の推進(担い手)
次世代の育成
人財ストックの活用
対馬グローバル大学

その課題解決のために

地域 × 学校

学部の力を地域に、地域の力を学部に。

対馬の全てが学部のフィールド

対馬には大学ない
若者少ない
地域が作った
てま

若者いけば行事文化継承!
こころが学生で、

過疎
地域が成り
て本当はよくわからない。

実際は地域へ出よう!
大学と連携して後押し
地域の課題を知ってバネ

学生とつながること
地域の人材も育つ!

交流の機会が

学生が来ておくれるための
学術研究もサポート!

(住まいやお金,メンタル
補助事業もしている。)

→研究内容とにより
対馬のファンづくり(内保さん)

研究したことを皆に知ってほしい!
対馬学フォーラムを主催
(市民にも知ってもらって誇り)
経済産業にも活かす!

内に学生入ると、
住民も人材に改めて見て

第2回 CUC 研究会 ゲスト: 前田 剛氏 (対馬市役所)
域学連携の新展開

2枚目 2021.10.27

18年前、研究
学生と対馬へ。

対馬と
県庁の
対馬市役所
域学連携の
SDGsなど

対馬市役所
SDGs推進室勤務

前田 剛氏

対馬市役所
SDGs推進室勤務

長年の
木島平にも!

対馬市
域学連携地域づくり推進計画
426～28

「対馬学会」 新たな価値の創造

成果の見える化をしよう!
→研究成果が眠っている...
地域に広く還元したい

「対馬学会」
成果の見える化をしよう!
→研究成果が眠っている...
地域に広く還元したい

課題発見型
→ 元々理系で
より、研究
深々

場づくり、コネクトが大事!!
→市民を巻き込もう! → できなくていい...
→ 行政主導でやることに

対馬の人々にゆだねて
みんなが対馬について考えよう!
(地域振興、環境保全)

どういこうにするか
先進地へ視察

屋久島学Vサーター
(シンポ、発表、1日レクレーション)

分割に偏りある
市民少ない...誰のため? 参考にせず

倉敷市(長瀬果)
(公開セッション(高校生も参加)
研究者のポスターセッション
お話し会など、その成果報告)

トウモロコシの収穫
「学術」も子ど
研究者が少なくて、地元の人少ない...

他にも
対馬には研究しにくい要素がいくつかある
→ 何が何を検索
手回りが大変なので困ります。

第20 CUC研究会 ゲスト: 前田剛氏 (対馬市役所)

域学連携の新展開

3枚目

2021.10.27

他地域を見つけたら
対馬はどうする?
住民が負になりすぎ、人物が
全体をエコに狙んだ!
→ たぶん集まったイベント!
地元の人集めるには
子どもたちの成果発表会も
子どもたちも目標に取り組みよう!
×T-2はポスト-発表 (60本を)
T-2は何もOK!
地元の人も初めて知ることがある
新しい交流がある
ポスト-発表制度もあって
高校生も研究者も真剣に!
"ESD対馬学" 発表 (対馬高校)
出展オポポ-パスと同様の権!!
高校生も集まる

イコスカ-エコ
対馬の原生林を...
食に肉するイベント
(研究発表と合わせてやる)
夜は交流会
イベントを地産地消でやること
300人集まったイベント!
対馬の
専攻性の教育、卒後継続の
市民講座的にや、?
Youtube, zoom, slack
オンライン授業も出来るように!
Web 講義
講師 市民、出身者、大、大
講師 協賛校、研究、大、大
いつか、どこか、誰か学ばす
本会の提供

対馬大学
活動のアップデート
みんな集めて来ない!
仕組みをどうするか
市民も気軽に研究に参加する
(Youtube)
新たなコミュニケーション
学生の負担を減らす
先生と生徒 winwin
オンラインとオフラインの使い分け
そこから市民研究者へ
課題は、ネットのハードル下げること
報告書や論文は伝わりやすいこと
Youtube, Slack などの情報共有など
ネットの活用もして、いいこと多い

第20 CUC研究会 ゲスト: 前田剛氏 (対馬市役所)

域学連携の新展開

4枚目

2021.10.27

Q & A

Q 実行委員会の役割は?
A 大学の先生などに委員になって
立ち上げた3年、会費もなかった。
今はあり... 基盤作りして。

Q 年内コストは?
A. web講師など65万
フックアップ 80万
→ パスなど 15万
外注委託 200万 (運営支援)
研究員の経費 900万 (4件を)
議会の資料にのこる

Q 研究成果は論文だけでなく
それを合せて公開しますか?
元になった資料も?
A. 博物館が持っている、
そこに置いておく。
市民も参加型の調査研究したい。

Q 対馬大学の 実務体制?
A. ポータルサイト構築、ゼミの11は
外部委託。進行調整も。
ゼミのコーディネーターや受講生の11は
こちら。ゼミのTAはこちらで担当決ま
っている。

Q 学生のT-2が足りなくなると
地域のT-2をどう対応する?
A. まだそこまでは...
やはりT-2は移住、戻りが多い。
地元負担を偏りかす。
負担が大きい
T-2は3。

Q 対馬大学のT-2が足りなくなると
地域のT-2をどう対応する?
A. まだそこまでは...
やはりT-2は移住、戻りが多い。
地元負担を偏りかす。
負担が大きい
T-2は3。

第3回 CUC 研究会

講師: 高田 良宏氏 (金大 学術メディア 創成センター)

研究データの公開の取り組み

データリポジトリによる研究データの公開
および研究データの早期公開と加速する「逐次公開型」運用モデル

2021.11.16

1枚目



高田 良宏氏

トビド美行の画像公開

オープンサイエンスの推進

大学の情報系センターに所属

研究データの管理

データリポジトリの確立と普及

金大の資料館(VIM)の構築

オープンサイエンスとは?

論文、研究データ、見つけやすさ、アクセシビリティ

研究成果を公開し、みんなに見てもらおう!

プロセスの見える化、再現性の担保 etc.

リポジトリとは?

→ 貯蔵庫のこと

- ・ 機関リポジトリ
- ・ サブジェクトリポジトリ

いまは 図書館 → データも取扱うように

失敗例

金沢大学フレスコ壁画研究センター

専用公開システム(DB)を作成して、数万枚の画像を登録

大学の目玉に!

しかし

研究終了とともにDBも消滅!

データも取壊す!!

お金の切れ目が縁の切れ目!

なぜリポジトリ?

大学はお金と人少ない

汎用的、運用コスト低い

データ移行しやすい

専用データベースよりは省々かも...

(例) パーティクルミュージアム

- ・ 大学が公開運用資金の田舎者
- ・ 所蔵品の公開、研究利用、教育利用 etc.

基本コンセプト

- 正確 (研究保証)
- 誰にも見やす

どなたも目指した

- デジタル化してあげよう! 実物がなくなると見れず
- 貴重な物は誰にも見やす

第3回 CUC 研究会

講師: 高田 良宏氏 (金大 学術メディア 創成センター)

研究データの公開の取り組み

データリポジトリによる研究データの公開
および研究データの早期公開と加速する「逐次公開型」運用モデル

2021.11.16

2枚目

サブジェクトリポジトリの例

どこの組織に属しているか?

どこの大学が所持しているか?

関係系に検索できる!!

メタデータリポジトリ (IRDB)

日本国内の学術機関リポジトリに登録されたものが全て見れる!

逐次公開型の運用モデル

ほとんどの研究データは公開されていない

資金、人材不足

公開したいデータは「選別」

研究者が「公開したいデータ」と非研究者が見たいデータは違う!

加工、分析してないデータが見たい!

考え方を変わる!!

たくさんとれたデータのみ、ってなるよりも高い

もっと手を取ったデータがいい!

ニーズをうまく見えない

早期公開!!

その下で充実させていく

逐次公開とオープン化の段階

- ・ 要請に応じてデジタル化
- ・ 作業進捗に合わせて公開 (追加、修正)

公開すること

忘れかけたデータ減らす

研究予算つかせ!

クラファン (お金をかせぐ)

いつもデータ整理してる。完了いつになるか。

メタデータも随時更新したい。簡単に。

データ自身も (写真など) 更新したい。

要望に応じたデータ管理システムを作成

第3回 CUC 研究会

講師: 高田 良宏氏 (金大 学術メディア 創設者)

研究データの公開の取り組み

データリポジトリによる研究データの公開
および研究データの早期公開と加速する「逐次公開型」運用モデル

2021.11.16

3枚目

これまでの成果

- 逐次公開型の運用モデルを提案

協力がまだ一定の理解!

- 早期公開/逐次公開の支援システムを構築

ICTに弱くても管理しやすい
地域学術資料に使えるのは

現在の取り組み

- 地域学術資料など複数分野で「逐次公開型の運用モデル」の検証
- 逐次公開支援システムの検証
- 所有所有者/作者のメリット・デメリット?
- 公開テンプレートのリスクは?

Q & A

Q. 奥州市のシステムの資金管理は?

A. 科研費が資金(高田氏の経費)
許可得て手書きの目録をデータにしている。
歴博の khirin からリポジトリで公開

Q. 地元の人やお金は?
今ではどうする?

A. どの自治体も多量なものを公開してはいる。
それと比べて前にデータと
そこから必要なものをより詳細
管理費の負担は大きくないが、
クワニアも研究員など外部資金に
依存している。

Q. リポジトリだとお金がかからない、
というのはテンプレート通りに
公開するからコストがかからないということ?

A. 分かれていけば「無料」で出来るが
業者に頼むと多少はかかる。
細かいところは機能足りないかも。
データの引き継ぎはしづらい。

Q. 他のリポジトリに公開しているデータを
引っ張りたい。どうすれば?

A. リンク見ただけです。
別のデータベースに飛ばすことは可能。
×データの再載せるとか
他のデータベースに登録されてないものは
こちらで公開してもいいかも。

第3回 CUC 研究会

講師: 高田 良宏氏 (金大 学術メディア 創設者)

研究データの公開の取り組み

データリポジトリによる研究データの公開
および研究データの早期公開と加速する「逐次公開型」運用モデル

2021.11.16

4枚目

Q. 逐次公開おのずかの
難点はあるか?

A. 量が多いものは逐次という
1回1,000件とか更新する。
そうじゃないと作業量は
そんなに多くなってしまう。
構築は済ませたい。

Q. 研究者は整理士がデータを
アップロードするの作業は少ない、
途中データ取りあがらなくて済むのは

A. 金大内ではあまりなかったが
これから必要かも。
古文書は書写でやるのが多い。

関係ある人がよってきた
「やらせてやる」
でもリスト化まではして欲しい。
その辺許可で544は公開する。
データの混在が公開の足を引いた
スタート位置にまっすぐ並べる。
オープンで生じるのはオープン化、データは
目録だけは作ってある。

存在だけを残してある。
こんなのがあってもいい。
それだけ資料に可能性
(次の研究の手がかり)

その他

Q. データ公開の最終判断は誰?

A. 全部自動化で済ませたい、
人の判断や、古文書など期限が
決まっている(130年経過した50%)
関係者に確認してやるはいいけど。

Q. リポジトリは WERD が作っている
IRDB は?

A. IRDB もリポジトリなので WERD の
ほう。おぼつか。

第30 CUC 研究会

講師: 高田 良宏氏 (金大 学術メディア
創成センター)

研究データの公開の取り組み

データリポジトリによる研究データの公開
および研究データの早期公開と関連する「逐次公開型
運用モデル」

2021.11.16

5枚目

Q IRDBとCiNiiで大体わかる?

A. 学会発表のIRDBには
そもそも登録してないものは
調べても出てこない。
「能登リポジトリ」ってことで
集めることになるのかなど。

報告 リスト化進行中

馬場
さんより

・能登に関する研究(研究というほどではない)
大学生が肉付してるものをリスト化した
マスタースタートを載せてない。大学連携の
成果物

とらまご網羅する?

Tターンシップ、岸の事業、
能登キャンパス構想や卒業など。

い
ん

小読みビニ

Tターンシップはスライドのみもあるし、
成果物としてちゃんと残ってるものもある。
事業としてながら、同じ事業で
分けるべきか。

眼鏡
さん

リポジトリは最初から分けては?

Tターンなのか、
論文、会費資料、データとか。

そういう風に分けてみて、
あとで細かくして良いと思う。

その他の部分はJPCOARなど

そういう風に置いておけるようにしてあげて。

自己主体は地域など入ることも
できる。細かくしてあげば(極力)
URにもあるといい。

金大のリポジトリを参考にしては。

NEW参加者!

寺口さん
能登町の役場職員
学芸員
社会教育全般のお仕事

第4回オンライン会合
(この回の記録は木下さんが担当)

〇 能登 GUU 研究会 11.30.2021 14:00 - 17:00
 Speaker I 寺口 学氏 能登町教育委員会事務局

〇 コロナ禍の影響
 - 公民館活動 中止
 → ネットを活用してやりか

〇 まなび「ハッケン」
 生涯学習施設紹介 (HP 能登町 公民館 ことば2021)
 - 町民が「自分」に合った生涯学習の場を「ハッケン」してもらう。
 - 公民館の活用をすすめる

〇 デジタル公民館「のどデジコミ」
 digital + community + kominikan
 ・ 各公民館で集約の講座の動画 (EX) 久田和紙の歴史
 ・ 5~10min
 ・ イベントは入れない (寺口さん 兼音でいい)

〇 公民館紹介動画
 ・ 編集・作成 → 有線テレビ

〇 地域デジタル図書館
 - 郷土史料の公開
 - 貴重図書への保護になる
 → データ化・公開
 ・ PDF 公開
 ・ 町のホームページ利用
 ・ 総務課と関係機関の協力

〇 能登総合研究会
 「能登町」を調査したい」問い合わせ多数
 ・ 若手の調査・研究の報告・発表の場
 ・ 地域への還元

〇 電子化
 ・ 電子化
 ・ 能登町マナー
 ・ リンクをはいておいた

〇 座談会として使用して
 K: 博物館つくることについて、ききたい。

〇 役割の業務ではなし
 〇 いろいろな「語り物」公開には!?
 〇 ネット公開には、気をつけている!
 〇 世代によって、使われ方が違う?
 Yes!
 〇 ハイブリットである必要性があるのでは
 〇 世代に依存なく
 両方必要
 貴重資料を守る。

Speaker II 川邊 咲子氏 国史歴史民俗博物館
 民俗研究

〇 なぜ民俗コレクションの研究?
 - 近代化・グローバル化 → 急激な変化
 → 向はどうか変化は対応してきたのか...という問い
 - 集めた民俗をこれからどうする...

〇 民俗保存のむすぶか
 - 死蔵してはならぬ
 - 活用
 - 維持・管理

〇 能登地域 民俗コレクション
 all: 29コレクション
 個人所有 → 子供が手放す
 小学校・自治体 → 維持・保管が難しい
 学校や自治体 行く評価

〇 民俗の価値
 - 世代を超えて伝わるという価値
 → モノの保存 → 歴史・情報がない
 → 社会への還元が不十分

〇 民俗の保存・継承の課題解決に向けて
 民俗 collection
 博物館の保存
 緩やかに保存
 変化の記録
 ・ 地域生活のなかで再び活用・アート作品としてどう活用?
 継承するには!?

〇 能登町・当日の記録
 学校
 情報・データベースの記録
 書籍
 「当日養老語学会」

〇 車輪島市・金蔵
 旧輪島市立民俗資料館の資料
 - 歴史民俗資料調査カードの記録 (1970' 文化庁調査)
 → 民俗と照合

〇 珠洲の大蔵ざらえ → スズシアター・ミュージアム完成
 「地域の宝」 → アーティストが作品に... → モノの歴史・来歴・ストーリー → 体験へ
 - 約 80 軒の家から 約 1200 点、42 集 (緩やかに保存) (正) + 情報 (市民向け民俗還元 EX) 市民向けワークショップ 民俗講演会
 〇 2020 集
 - 市内の保存所 10 集
 - 南町書土調査 → 家の来歴シート
 ・ 民俗シート

・ 変化を仕とれる
 ・ 多様なアクターと連携
 ・ モノの価値

第5回 CUC 研究会 講師:熊澤輝一氏(総合地球環境学研究所)

つなぐ×ひろがる 地球環境学ビジュアルキーワードマップ

1 科目

元同僚
北村さんからの紹介
熊澤さんは、地球研で10年以上色々な分野の研究に当たっています。

熊澤さん自己紹介
・茨城県と市民協働を支援
・オンロジ連携の活用
・システムコンテツ構築
・未来社会の国土論 探究
HPあります。 など活動しています。

■ プロジェクトも
いろんな知識がながれてきている。その理解を深めたための道具。

■ 主なユーザーは大学生や研究者を想定。

■ プロジェクトをアイコンで表現!!
それがマップのように見えます。実践プロジェクトは200のアイコン。コアプロジェクトは50のアイコン。

プロジェクトにスタッフをいれしよにキーワード選び、デザイン化

■ 用語解説
・短い説明文(30字) **すく大変だ!**
・簡易説明文(60字) **理解力がアップ**
・詳細説明文(120-160字) **テキスト**

■ 関連資料の掲載
情報がどこにあるのかを知りたい!
・地球研に関連する著書 在籍していた、協同など
・地球研の成果物(記事や発表資料など)
・地球環境学関連の他団体web サイト

キーワード
お気に入りアイコンの保存
気に入ったアイコンをまとめて、一覧で見ることが出来る。
たくさん集めると何が起る...? という遊び心もいれたい。

1. 地球環境学ビジュアルキーワードマップとは?

■ 地球環境学の総図鑑
→スマホで「手の平に地球環境学」
アイコンを探して選べば、関連した情報

興味あることにサッと調べたい!

第5回 CUC 研究会 講師:熊澤輝一氏(総合地球環境学研究所)

つなぐ×ひろがる 地球環境学ビジュアルキーワードマップ

2 科目

■ サイトストーリーの進化
・マップがわかるように変更
・探検Qで研究視点キーワードのプログラム。
SDGsアイコンでも検索できる。

地球研の研究には、4つの柱
それぞれに対応するプログラム

Q & A

Q. 一般の研究者を対象としたら、説明文は誰へを想定?
A. 大学3年生、分野違いの院(院)生を想定。興味ある高校生や若手もはいるレベル

Q. VKM自身のつくりかたなど、成果として出す予定はあるか?
A. 他大学など応用できるといいのは。知識としてオトロジをホップしたいと思ってる。

Q. 「地球研の本棚」と「アカイブズ」の違い?
A. 地球研の本棚は販売されている書籍など。アカイブズは研究所として残っているもの。地球研のメタハイスにアクセスしている。ただし、全ては含んでいない。登録している。全部もつづけることもできるが、あえて。

5. VKMの振り返りや課題
環境学の特徴は?
多分野と関わり研究しているで、分野、事例間横断による理解が必要

■ VKMの成り立ち
地球研を表す絵
どこにデザインされたかかかったように

プロジェクトは5年で終わる。研究範囲も広すぎるから1枚の絵に描けない。
キーワードをアイコン化したマップのように表示しよう!

3. 機能実装について

■ 実装した機能

- UI (デザイン)
- Web API (フロントエンド)
- RDB (データベース)
- オントロジ (辞書と定義)
- RDFトリプルストア (ネット公開)

地球研
3つの団体が連携して、VKMを作りました。
システム会社
デザイン会社

第5回 CUG 研究会 講師:熊澤輝一氏(総合地球環境学研究所)
つなぐ×ひろがる 地球環境学ビジュアルキーワードマップ

3枚目

■ VKMのこれから

- ① 研究者自身の情報と連携
- ② 論文の所在情報(web)
- ③ 多言語対応
- ④ 地図情報と連携
- ⑤ 地球研 SNSと連携
- ⑥ 利用者にアカウント発行
- ⑦ ゲミフィケーション機能(遊び心)の提供

■ おわりに

- ・開発はゴールではない。
- どこにどんなデータがあって、
誰が困ってるか、というサービスの提供
だけでは足りない。

⇒ 利用してもらうための
コンテンツデザインが必要

- ・教育コンテンツも WSプログラムの開発
- ・コンテンツを提供する場そのもののデザイン
- ・その場面が必要な問題設定を、
簡潔に社会に提示する。

環境研は5年プロジェクトで
どんどん変わっているのよ。
データが深まってくると、
大きな幹がないのでもう少し
部分がある。



Q & A

- Q. 利用者からのフィードバックとりますか?
誰が使った、感想など。
- A. グーグルアナリティクスで統計とります。
他に、セミナーを利用して意見を聞き、
それを参考に修正している。
- Q. 一般の人も対象?
- A. ある程度知識がある人は見やすいもの。
研究のための本格的なものではなく、
参考分岐を調べるくらいなもの。
見やすく、ハードルの低さは自信がある。

第5回 CUG 研究会 講師:熊澤輝一氏(総合地球環境学研究所)
つなぐ×ひろがる 地球環境学ビジュアルキーワードマップ

4枚目

Q. データをオープン化している、という流れ
だが、地球研はどうですか?

- A. 地球研はデータの再利用の
取組みを10年くらいやってきたが、
5年プロジェクトなので、データが
活かしにくい。世界のデータクラウドに
共有されているが、作り手がハンドリング
している。
組織や人など構造上難しい。
その代わりに、研究者がどの
大学に転出したとか。
メタ的な情報に価値を置いている。
これは地球研が抱える課題です。

Q. 教育プログラムは具体的に考えている?

A. 2つあり、

- ① VKMを使って授業してくれた人が
います。関心のあり方とを選んで
レポートを書く。
- ② 高校生と「プログラム釣り」をした。
釣ったものの意味を考えた上で
納得させたOK!
好評だった。



3. その他の活動

珠洲市民図書館との打ち合わせ

日時：2021年8月24日（火）10：00～11：00

場所：珠洲市民図書館

参加者：大門 充氏（館長）、才式嘉明氏（参事）、木下、北村

概要：

- 本研究会の活動を始めるにあたり、目的や計画について共有。図書館としても基本的に賛同。
- 図書館の重要な機能にレファランス（必要な情報にどうたどりつけるか）がある。他に、くつろいだり、集いを持ったりする場という性質も図書館にある。
- 人や組織をつなぐためのコンテンツの一つとして「研究」へのニーズはありそうな印象。例えばふるさと学習。
- 子どもに関しては、学校司書も重要な役割を果たしうる。例えば、小中学校のSDGs学習において、目利きとしての司書の知識・技能が効果的に発揮されている。
- 地域外との協働による地域づくりの先進事例として、海士町、小布施市（オープンガーデン、観光）、四万十町（ドラマ撮影）などもある。
- データベースが稼働した際には、図書館と連携できる可能性がある。例えば、図書館からデータベースについて紹介することや、紙媒体を置くことなどが考えられる。
- マイスターの卒業研究の成果をもっと活用できるのでは、という問題意識が以前からあった。市民がまずその存在を知ることにより、成果にアクセスする機会が増えるだろう。
- 成果を市民向けに発信する企画を図書館が共同で実施する方法もありうる。パネル展示や特集コーナー設置など。講演会などの利用には調整が必要。
- 成果情報や資料を単に機械的に揃えるだけでなく、書店のPOPのようにお勧めポイントなど一言添えて成果を紹介する目利き機能を、司書や研究者が果たせると市民に活用してもらいやすくなるかもしれない。

大学・地域間協働の実践

- 「いしかわ里山塾」（アドバイザー：川澄厚志氏）の珠洲市でのフィールドワーク受入れ支援（本研究会からは馬場、志保石らが参画）
- 金沢大学 秀峰（ほすみね）プロジェクト「COVID-19後の都市農山村関係にみる新たな地域資源の共有基盤形成に関する研究」（代表：川澄厚志氏）への研究協力者としての参画（北村）
- 能登SDGsラボ2021年度提案型実践プログラム「里山里海の資源を活かした地域循環型の社会・経済システムの構築」（PG-1）（代表：上野裕介氏、幸福智氏）への参画（北村が能登SDGsラボ事務局として運営支援）
- このほか、奥能登チャレンジインターンシップの受け入れなど実績あり。

オンライン講演会への参加

日時：2021年12月20日（火）15:00-17:00

主催：角間里山ゼミ会

講師：浅野敏久氏（広島大学）

テーマ：エコミュージアムにおけるリアルとデジタル～広島大学総合博物館の試みから

概要：

- CUC 研究会メンバー3名（高田、川邊、北村）が参加し、能登での地域・大学間協働の推進に関連する気付きを中心に研究会全体メールで情報共有した。

（講演内容について北村メモより抜粋）

- 広島大学の総合博物館自体はとても小規模だが、それを核として「キャンパスまるごと博物館」や、さらに「地域まるごと博物館」と3階層構造にしている。
- 広島大学総合博物館では、コロナ禍の逆風をデジタル整備の機会と捉え、mediawikiというプラットフォームを活用して「入り口」を整備した。魅力的で使いやすいトップページになり、そこから既存のデータベース（キャンパス内の植物の情報）などにリンクする形。万単位の年間アクセス件数で最近さらに増加中。
- 新たなコンテンツとして地域資源の動画を作成している。まず学生向け授業のなかで実施。大学博物館としては教育を重視。
- 動画と並行してツアーの開発も進行中。ここでも教育と関連づけて学生が参加するモニターツアーを実施した。ツアーの主たる対象者層は地元住民（地域外からでなく）。今後、一般参加者向けモニターツアーも実施する計画。DMOなどが観光商品化していく見込み。
- いずれにしても、目的意識を持ってコンテンツを活用する人がいることが前提。

（以下、川邊メモの補足・所感より要点を抜粋）

- 「エコミュージアム」や「まるごと博物館」は、2000年代頃から全国的に聞かれるようになった概念。こうした概念には、博物館の収蔵品や展示物（静的・過去のもの）と地域のリアルな生活環境・自然環境（動的・今現在生きているもの）を繋げて見せることができるという点と、歴史・文化・自然など地域に関する様々な分野を融合して見せることができるという点において大きな可能性がある（ただし、実践の試みはほぼ皆無）。
- 屋外の活動が多いエコミュージアムであれば、屋内の博物館と比較して密になりにくいことから、コロナ禍でも制限なく人を呼べる可能性がある。
- これまでエコミュージアムでは、地域のコア施設やサテライトを示す地図や、お宝マップなどを作って活用する取り組みが多く、そうした地図のデジタル化ができれば誰でも気軽にスマホ片手にエコミュージアムを回ることができるなど、デジタル化することで展開できることは多くありそう（人材と資金が必要だが）。

4. データベース設計の基本的な方針

研究会における検討の結果、以下を基本的な方針とする。

なお、データ貯蔵庫としてのリポジトリと、エンドユーザーが見るインターフェースの2つの次元で検討する必要があることに留意。

主たる利用目的・利用者層の想定

- 利用目的（想定される状態）：能登について学びたい人が、能登における／に関する既存の資料（調査研究の成果物を含め、新たな学びに役立つもの）を一元的な経路から検索・入手するため。
- 利用者（エンドユーザー）：
 - 市民全般。能登の地域住民を含め、能登について学びたい人。中学生程度から高齢者まで幅広い年代を含む。
 - 能登における／に関する調査研究を実施する人。学生、大学教員など。

対象となる「資料」の範囲

- 一定の方向性を持って編集された、能登に関する資料。例えば以下。
 - 学術論文
 - 卒業論文
 - インターンシップ報告書
 - 書籍
 - その他、能登における／に関する今後の学びに役立つと考えられる資料。例えば以下。
 - ◇ パンフレット
 - ◇ 新聞記事
 - ◇ 一般雑誌（の記事）
 - ◇ 動画
 - ◇ ゲーム

※短い感想程度の SNS 投稿などは含まない想定。

データベースの構成と活用促進手段

- リポジトリ：データベースの核となる貯蔵場所。書誌情報など「メタデータ」を第一優先として収録。インターネット上で本体が公開されている成果についてはリンク情報を付ける。
- ポータルサイト：エンドユーザーにとって「親切的な入口」となるインターフェース。操作性や視覚的な楽しさを目指す。直感的に操作するうちに学びが深まる仕掛けまで導入できれば理想。
- 目利き情報：本の「帯」のようなキュレーションの仕掛け。本データベースの構築・運用に関わる研究者たちが、自身の関心や専門性を活かした紹介文を添えて、価値ある既

存の研究成果を紹介する形などを想定。

- 利用場面の設計：SNSなどでの交流サイト開設などを検討していく。例えば、ランダムに資料を選択し、それについて意見交換の機会を設ける仕掛けなど。利用促進（アクセス増）につながることを期待できる。

5. 既存の研究成果情報のリスト化

リスト作成作業

- 研究会メンバー（馬場）がエクセルで原案作成。
 - 当初の収録対象は金沢大学の能登におけるフィールド研究論文集や珠洲市における大学生インターンシップ報告などのメタデータ。
- リスト原案をグーグルのスプレッドシートとして関係者限定で共有。
 - 研究会メンバーがデータを追加するとともに、記載項目など仕様や使用感について研究会全体のメールでコメントを提供。

記載項目などの検討

- メールでの議論をもとに、研究会の第6回会合において詳しく議論（本報告書「2. 研究会会合開催結果」の「第6回オンライン会合」部分参照）。

2022年度以降の作業

- 利用するリポジトリを選定
 - それに合わせて記載項目などの仕様ができるだけ早期に確定。
- リスト自体（収録するメタデータおよび成果物へのリンクなど）は随時改訂。
- 「完成」がない作業なので、「逐次公開」を基本とし、最初の公開を早期に目指し、以後、定期的に改訂されていく仕組みを作る。

6. 2022 年度以降の活動目標

本研究の核心は、データベース構築に向けた検討であった。しかし、データベースはあくまで手段であり、その先には、能登における／に関する研究の拡充や、それを通じた能登の活性化という目的がある。従って、データベース開発と並行して以下のような展開の可能性を挙げておきたい。

大学のフィールドワークとの協働強化

- 第5回オンライン会合で講師の熊澤氏から話のあったとおり、データベース構築はゴールでなくスタート。データベース活用の場面を設計し提示することも大切。まずは東洋大学や石川県里山振興室など既存のフィールドワーク主体との間で、お互いに利点のある形でデータベース活用場面を設計・運営できるとよいだろう。
- こうした個々の活動の成果も一元化することで、能登に学際的（あるいは超学際的）な大学が存在するのと同等の価値をもたらすことを目指すことが可能。これは能登キャンパス構想が目指してきたことでもあるが、研究成果の一元化や受け入れ側の地域の体制や位置づけの明確化により、より目的に近づくことが可能と考える。逆に言えば、能登に既にこれだけリソースが揃っているながら活用しきれなければ、とてももったいないことである。

実践と研究の交流集会

- 第2回オンライン会合で紹介されたとおり対馬市では「対馬学フォーラム」の年1回の会合が大きな役割を果たしている。地域内外のあらゆる関係者が一堂に会する機会とするため、前田氏を中心とする受け入れ地域側が工夫し、制度化し、実施体制を整えて開催している。これは大いに参考にしたい事例である。
- 能登においては、既に複数年にわたって集会開催実績のある「能登総合研究会」と連携することや、2021年度に初開催した「能登の里山里海学会」の発展版として参加対象を拡大していく可能性などが考えられる。その場合は実施体制強化（コーディネータ人材の新たな配置など）が必要となる可能性があるため併せて検討が必要。
- 屋久島学ソサエティや能登総合研究会などのように、研究集会からの成果物として冊子を作成する例もある。催しの結果自体も、文字媒体の研究成果物につなげることができれば、そのときその場にいなかった人も後に参照でき理想的（長野県飯田市の「学輪IIIDA」が参考となる）。しかし、編集と出版には通常の場合、多くの労力と費用が必要で、持続可能な方法を設計することが肝要。

外部資金獲得の可能性

- 「大学×地方創生」や「SDGs×地方創生」など関連するテーマでの公募型外部資金の獲得を目指すことも選択肢。こうした資金により、地域側が設定した課題に対して大学・研究機関が研究提案を応募し、地域側が選定した研究プロジェクトに資金を再配分しつつ受け入れることも可能となる（飛騨高山大学連携センターの公募型調査研究が参

者になる)。データベースやフィールドワーク指導人材などを有する地域は、大学等の教員や学生にとって魅力的なフィールド研究対象となりうる。調査研究を助成できれば更なる強みとなる。

- 検討に値する外部資金制度の例として、総務省「中間支援組織の提案型モデル事業」や、科学技術振興機構「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム」などがある。これらは例にすぎず、注意深く情報収集を続ければ適切な資金制度が出たときに機敏に対応可能。

実施体制の整備

- 以上のような展開を一元的に進めるには、強い実施体制が必要。有志によるボランティア活動では限界がある。また、既存の個別業務の継続だけでも発展性は小さい。
- 対馬のように行政（および大学）のなかで公的に活動と実施主体を位置づけることも検討に値する。プラットフォーム組織である能登SDGsラボを通して構想を動かしていくことで調整が円滑になる可能性もある。
- 地域と大学の協働に関して、大学には専門部署があり、専門人材が配置され、ノウハウなど専門的知見が蓄積されている例も多い。一方、大学のない地域において、そのような専門人材を確保することは容易ではない。しかし、専門人材を登用できているかいないかの違いが結果の違いになる。例えば総務省の「地域プロジェクトマネージャー」制度の活用により、地域おこし協力隊からのステップアップとしての人材確保・育成・定着化を図ることも自治体主導の施策として検討に値すると考えられる。
- 地域の図書館や学校（そこで働く司書も）は重要なパートナー。珠洲市、能登町を始め能登地域や石川県の教育委員会など関係部署との連携を模索する。

6. あとがき

研究会メンバーの所感（任意）

伊藤：能登を舞台にしたさまざまな調査研究活動による成果が、地域内外のすべての人々にとって、地域を深く知り、地域をより良くする活動を生む原動力になるようにする手助けをすることが、このプロジェクトのめざすべきゴールかと思います。能登のデータベースは、調査が得意な人、データを整理するのが得意な人、既存のデータから新たな発見をするのが得意な人、プロジェクトが続けられるように応援する人、色んな人の「得意」を集合させて作り上げるのが理想的です。その中でもいちばん大事な役割が、このプロジェクトが能登にとって大事なんだ、あなたの力が必要だ、と言い続けられる、道の先を照らす「灯り人」の存在だと思います。この一年の取組はその小さな明かりを最初に灯した大きなステップでした。これからも細い枝から始まり、徐々に大きな薪をくべながら、やがて多くの人が集まる暖かな「焚き火」にしていけたらと思います。

杉盛：果実をつける植物にとって、生命を未来につなぐために本当に大切なのは実（果肉）ではなくその中にある種のはず。それと同じように、地域をフィールドとする知的な活動にとって本当に大切なのは、もしかしたら成果（出口）よりも、それがいかに誰かの次なる学びのタネ（入口）になるか、なのかもしれない。なぜなら、そうして何人もの「知」が繋がっていくことが、地域の人々の営みを豊かにし、地域の未来をひらく気がするから。個人的には、そういう学びのタネを探したり、人に紹介したりするのは好きな方なので、能登の学びの「入口」づくりに少しでも貢献できればと思う。

川邊：私はこれまで地域において収集・保存されている民具について調査・研究を行ってききましたが、そのモチベーションの一つには、せっかく後世に伝えるために集められた民具の多くが全く知られることなく死蔵されている現状をどうにかしたいという想いがありました。研究成果も同じです。せっかく報告書や論文、記事などにまとめられているのに、そうした情報を必要としている人に届かないままでは、まさに「もったいない」状況です。能登について知ってもらえる重要なチャンスを逃してしまっているとも言えます。研究成果は、地域内外の人々の協働の結晶であり、貴重な地域資源のひとつです。そうした資源が活用されるように、必要な人に届けられるように、橋渡しができれば、そして、多くの人々に能登のことを知ってもらえる手助けができればと思っています。

木下：私は現在、能登に来て4年目ですが、教育支援の仕事をはじめ、行政が主催するまちづくりの企画、住んでいる地域の行事などを通じて、県内県外を問わず、大学生や研究者が多く訪れるところだと実感しています。年長者のお家に伺うと、これまでに訪れた学生や研究者から協力のお礼として寄贈された報告書や論文があり、思い出話とともに見せていただくことがよくあります。このようにお家に保管されているもの

には、web上で検索してもアクセスできないものが少なくありません。点在している研究・調査の成果や、学術的にテーマ別に分類されている情報について、地域に暮らす人たちが、能登に興味関心を持つ人たちが、共有し利用しやすい場をつくることが本研究会の試みということで、一年取り組んでまいりました。対馬市での先進的な事例はじめ、データベースづくりにおける基本的な知識や技術、博物館や公民館、研究所における実践事例など、本研究会を通じて多く学ばせていただきました。今後はまずデータベースをつくり、みなさんが試しに利用できるように始動させたいと思います。みなで使いながら修正するという反復にて、地域の資源になっていくことを目指したいです。

北村：以前から感じていた課題に対して自分にできることをしたいとの思いから、このプログラムを提案しました。「言い出しっぺ」なので、形の上で研究会の代表を務めました。データベースについて自分の知識がほぼゼロということもあり、手探りの連続でした。そんななか、外部から知見をいただく機会に恵まれました。対馬市の前田さんや地球研の熊澤さんから先進的な事例を聞き、大いに感銘を受けました。haruデザインの納谷さんのグラフィック・レコードが、ともすれば無味乾燥の印象になりやすいオンライン会合の記録に彩と楽しさを加えてくれました。高田さん、寺口さん、川邊さんは議論への参加だけでなく自らご講演くださいました。小林さんは前田さんの講演の回を企画してくださいました。杉盛さんと馬場さんは珠洲市の移住定住促進や域学連携の観点からインプットを多くくださり、馬場さんは既存資料のリスト作成をくださいました。能登にいるメンバーに加え、外から参加するメンバー（伊藤さん、川邊さん、高田さん）も非常に熱心に参加してくださいました。頼りない代表を補って余りある頼もしいメンバーたちに恵まれ、研究会としてとても有意義な活動をおこなうことができました。みなさんの貢献の結晶（の一部）が本報告書です。本当にありがとうございました。

副代表の木下さんはいつも頼もしく見守り、そして必要なときにいつでも頼りない代表を支えてくださいました。これからは木下さんの主導により、これまでと同様に、いや、これまでよりもっと活発に活動が進むものと確信しています。私自身も微力ながら引き続き末席から参加させていただき、構想の実現を見届けたいと思います。

以上